

台湾海峡横断記

中国と台湾の政治的な対立で、台湾海峡は1949年以来五十余年間も通商、通航、通郵のいわゆる「三通」が途絶えた。中台関係が改善され「小三通」とよばれる緩和政策で往来が復活したのは8年前で、昨年からは外国人にも適用されるようになった。

文・写真 中村達雄



東引島に向かう臺馬輪

海峡横断の出発地に選んだ港町基隆の街路に冷たい雨が降る。大陸の華南から吹き寄せる湿った季節風が台湾海峡でさらにたつぷりと水分を吸収し、それが台湾北部の山脈にぶつかり霧や雨となつてこの街を濡らすのだろう。晩冬から早春にかけては南部の高雄などが30度近い高温になつても、基隆は相変わらず肌寒い日が多い。入り江の三方を山に囲まれた天然の良港には西岸と東岸に近代的な埠頭が開き、媽祖を祭った慶安宮界隈が東と西を結んで旧市街を形成している。

内戦に敗北した国民政府が台湾に移り、約100万人の将兵や共産党を嫌った民間人が軍艦や商船で海峡を渡って上陸したのがこの街である。最後の艦船が基隆港に到着してから五十余年、激しく対峙した中台双方によって海峡は封印され、兩岸の行き来はなくなった。米ソ両国の冷戦が東アジアに波及し、台湾海峡がアジアにおける冷たい言葉の戦争の最前線に組み込まれた。

荒天続きで欠航していた馬祖列島行きのフェリー「臺馬輪」は、今晩三日ぶりに出航するという。西岸の島を後にし、馬祖列島の中核をなす南竿島に進路をとる。東引島を離れてしばらくすると天候が崩れ、にわか白波が立つてきた。五星紅旗を掲げた漁船がうねりに呑まれそうになりながら操業している。そのほか後方に亮島の岩礁が見える。

風波の高い海域を1時間半ほど航海したところで前方に島影が見えてきた。北竿島にちがいない。やがてその左側に目指す南竿島がうっすらと姿をあらわす。

南竿島の福澳港に接近すると、山の中腹に「枕戈待旦」（戈を枕にして夜明けを待つ）のスローガンが見える。中国の正史『二十四史』の「晋書」劉琨伝に出て来る言葉で「夜寝るときも警戒を怠らない」という意味らしい。大陸まであと60キロの近距離にある南竿島は「反攻大陸」政策の最前線だった。船は8時30分に棧橋に接岸した。臺馬輪はここで往路の航海を終え、1日かけて基隆港に引き返す。

福澳港旅客サービスセンターの業務は地元の桃源旅行社が代行している。担当の王権さんによれば、海峡兩岸の往来は「小三通」の緩和政策で



客運大棟で乗船手続きをする人の大半は迷彩服を着た若い軍人だ。その中の一人に話しかけてみると、兵役で馬祖列島の南端にある西莒島の任務に就くのだという。

臺馬輪は21時50分に旅客埠頭を離れ、水先案内の小船に誘導されて港口に向かっている。こぬか雨が降る上部甲板の最前に立って港町の夜景に名残を惜しむ。沖合の小島、基隆嶼を右舷に見たところから船は小さく揺れ始めた。台湾北端の富貴角（半



▶基隆港東岸埠頭。臺馬輪は対岸から出港する
▲臺馬輪(5039トン)。瀬戸内海を走る内航船を改造して馬祖航路に就航した。吃水が浅く、外洋にむかないのでしばしば欠航する



島)を越え台湾海峡に進入した臺馬輪は強い風浪にもあそばされ、まっすぐ立っているのが困難になつたので二等船室に戻つて横になる。枕灯で航路図などを確認しながら、航空機のなかつた時代に船で海峡を渡つた人々に思いを馳せる。通路に置かれた乗船客の旅行カバンが、船の動揺で右に左にごろごろ動き始めた。船酔いで嘔吐する気配があちこちから伝わってくる。

東引島から南竿島へ

船内放送が東引島の中柱港棧橋に接岸したことを伝えていた。時計は6時過ぎだ。急いで起きて、下船口から棧橋に降りてみる。滞在時間はたったの30分しかない。埠頭左奥の海浜から一気にせり上がる丘の斜面に家屋が寄り集まっている。地図で見ると、東引島は馬祖列島の最北に位置する台湾海峡の絶海の孤島である。島の反対側にある東引燈台が有名ならしい。香港や厦門、福州などの海港から上海や天津に向かう船舶の重要な道標になつているのだ。

臺馬輪は短く汽笛を鳴らして東引



▶丘の上まで広がる東引島の集落
▲馬祖海域では中国漁船も操業する

▶南竿島福澳港には今でも大陸を警戒する標語が掲げられている

上から順に

- ▼福澳港の高見から福建沿岸の陸影が見える
- ▼福澳港～福州馬尾港を90分で結ぶ連絡船
- ▼馬尾港に掲げられた中台統一のスローガン
- ▼福州閩江河畔の中亭街は市内有数の繁華街



フェリー運行情報

- 基隆港～南竿島福澳港
新華航業公司(臺馬輪) <http://www.shinwa.com.tw>
- 南竿島福澳港～福州馬尾港
桃源旅行社 <http://www.tauyuan.com.tw>



2001年に解禁され、外国人も昨年6月から可能になったとのことだ。1日2便、午前と午後に福澳港と福州の間を定期船が結んでいる。午後2時の便を予約し、港近くの旅館に荷物を預け、スクーターを借りて南竿島の散策に出かけた。

福州馬尾港まで

船待ちの4時間は南竿島を一周するのに十分な時間だ。軍事施設や監視所が各所に散在し、兵役の若い軍人が歩哨に立っている。島民の数よりも軍人の方が多いみたいだ。福澳

港の高見から西の方角を望むと、水線の彼方に福建省の陸影を見ることができると。大陸はこんなに近いのだと思う。

午後2時、出国手続きを済ませて馬尾港行き「安麒輪」に乗船する。ここから先は50年以上も往来が途絶えていた航路である。胸が高鳴る。数えてみたら、定員150人の船に乗客は17人しか乗っていない。檳榔を嘔む郭文輝さんの家族は海峡を越えてお嫁にきた奥さんの実家、福建省の南平まで里帰りするらしい。郭さんの口が紅を塗ったように赤い。きつと覚醒作用のある檳榔が唇に反

応しているのだろう。

安麒輪は1時間ほどで閩江河口に到達し、行き交う貨物船をかわしながら大河を遡行する。午後3時半、福州馬尾港税関の棧橋に近づいた安麒輪の船窓に「和平統一、一国两制」の紅いスローガンが映った。台湾海峡を渡る旅は、基隆港を出発してからわずか18時間で終わろうとしている。五十余年間の星霜に較べると、それは瞬きをするほどの短い時間だった。今回は出来なかったが、いつか中国の厦門から金門島を経て台湾本土に到るもうひとつのルートをとどめてみたいと思う。 ■